

イメージ発想に関する研究(3)

田 川 典 子

I. 研 究 目 的

ダンス創作時に、「何を」「どんな動きで」「どのように」表現するかということを一体のものとして考えられなければ、全くダンスの本失を見失っているものといっても過言ではない。なかでも、「何を」ということは表現の核となるものであり、それが明確に捉えられるか否かはその人のイメージ発想力に懸るものと考えられる。そのイメージ発想の基盤には、パーソナリティが深く関与していることが予想され、それは、幼年期の成育過程から現在のその人の有り様までも規制していると思われる。

今回は、イメージ発想の基盤を知る資料の一つとして向性検査及び思考力検査を実施し、個人のデータとしてファイルするとともに、被験者全体の傾向を抽出しその結果を報告した¹⁾。そこで今回は、ダンス創作の場面で発想されるイメージとの関わりを探るため、前回と同じ被験者に作舞を前提としたイメージ課題を与え、そこで想起されたイメージ語と既にファイルされている個人のデータを照合し、その関連の有無を検討することを目的とするものである。

II. 研 究 方 法

A) イメージ語の抽出

1. 課題の設定

イメージの課題『その扉の前で』は、“扉”という時間と空間を仕切る物としての外面性を内面・心象の変異と重ねやすく、多様なイメージを内包しているのではないかと、また卒業期を目前にした被験者達の心情は『その扉の前で』とすることで、ある限られた背景の中に映しだされるかもしれないという考えのもとに設定した。

2. 被験者

東京女子体育大学、昭和58年度4年次ダンス履修者から抽出した前回と同じ学生60名。

3. 実施の方法

イ. 期 日 昭和59年1月 筆者担当の授業時

ロ. 場 所 本学第4体育館

ハ. 抽出の方法 イメージ語は、作舞を前提として、課題を提示した直後、瞬時に思い浮かべた一語を記載させ、その後、中核となる舞踊イメージへと操作させた。

4. イメージ語の分類及び比較資料の作成

表1 イメージ語の分類 — 1.

収集したイメージ語の分類表

- 1) 被験者全体のイメージ語一覧表
- 2) A～Eタイプに分類したイメージ語一覧表
- 3) イメージタイプの集計一覧表

得られたイメージ語を筆者及び松本らによる先行研究²⁾に基き、(A)形態、(B)機能、(C)感情・情緒、(D)抽象、(E)夢・物語、に分類し、A～Eタイプとした。

B 検査項目の抜粋

報告済みのデータからイメージの想起に関わりが予想される項目を抜粋

- ・ 向性検査（下位尺度）から
 - 1) 一般的内・外向性
 - 2) 劣等感・優越感
 - 3) 感情安定性・感情変易性
- ・ 思考力検査（下位検査）から
 - 4) 認知型（直感型・分析型）
 - 5) 問題解決能力

C イメージ語と各種検査との照合

1. イメージ語のタイプと検査項目1)～5) 評定一覧表作成
2. タイプ別プロフィール（平均）表作成
3. イメージタイプと抜粋した検査項目別段階評定における人数の分散表作成
4. 抜粋した1)～5)の検査項目一覧表の中から、評定の両極（例えば段階評定1～7の1と7に該当するもの）にある被験者2名ずつを抽出し比較資料を作成 … 本論より割愛

III. 結果及び考察

1. 各イメージタイプ間の結果と考察

作舞を前提としたイメージ課題「その扉の前で…」に対して得られた被験者全員のイメージ語を集計したものが表1及び表2である。課題に対して“厚く重い扉”“会社の扉”のように扉そのものをイメージ

被験者	イメージの分類	(A)形態	(B)機能	(C)感情・情緒	(D)抽象	(E)夢・物語
1	E・A			好奇心		
2	K・A			好奇心		
3	T・A			希望と不安		
4	M・I			勇気		
5	K・I				歴史の重み	
6	N・I				春	
7	S・I				人生	
8	S・I			好奇心		
9	S・I				未来	
10	K・I					閉じこめられた人形
11	S・I			後悔		
12	M・U		開園前の遊園地			
13	K・V			言うべきかわざらざるべきか		
14	A・E			苛立たしさ		
15	U・O				未知の世界からの脱皮	
16	Y・O			孤独		
17	K・O			開放への期待（希望）		
18	Y・O				女の後姿	
19	I・K				未知の世界	
20	K・I				回想	
21	H・I				少女時代	
22	Y・K			心の揺れ動き		
23	K・U				神々へ通じる	
24	M・K			不安		
25	N・K			好奇心		
26	K・K				暗闇	
27	M・K			気がかり		
28	M・K			苛立ち		
29	M・S				休暇	
30	Y・T				新たな出発	
31	R・S				挑戦	
32	R・S					広野にたたずむ少女
33	Y・S				光を求めて	
34	M・S				別世界	
35	T・T			希望		
36	Y・T				過去と未来のはさま	
37	M・T			希望		
38	T・T			不安と期待		
39	Y・T	厚く重い扉				
40	J・T	会社の扉				
41	Y・N				道に立ちかかるとかる巨大な扉	
42	T・N			好奇心		
43	S・N			絶望		
44	Y・N			不安		
45	M・H			希望と不安		
46	C・H				異次元の世界	
47	H・T					玩具の心
48	Y・N				子供の誕生	
49	Y・H			ためらい		
50	M・S			戸惑い		
51	H・M				生命の誕生	
52	A・M				明かるい未来	
53	K・M				自問自答	
54	J・M			ためらい		
55	E・Y				暗闇	
56	E・Y			怒り		
57	N・M				自分を探す	
58	Y・Y					夢物語
59	K・Y			悲しみ		
60	K・W				届かぬ祈り	

表2 課題からのイメージ語の分類

Image Type	N	%
A. 形 態	2	3.33
B. 機 能	1	1.67
C. 感情・情緒	27	45.0
D. 抽 象	26	43.33
E. 夢・物語	4	6.67

したもの2名、扉の開閉、仕切りとしてその機能性からイメージした“開園前の遊園地”が1名で、形態や機能的イメージは全体の5%と少なく、次いで“夢物語”や“閉じこめられた人形”“広野にたたずむ少女”“玩具”など空想によるイメージのもの4名、全体の6.67%であった。好奇心、希望、不安、ためらいなどの感情・情緒のイメ

ージは27名で45.0%であり、歴史の重み、未知の世界、未来など抽象的なイメージは26名43.33%で全体の88.33%がこの2タイプで占められている。

次にイメージ語をA～Eタイプ毎にまとめたものが表3である。囲みの長さは各種類別のイメージ語の占める割合を表わしているが、C・Dタイプの中で同語、同義語は一語のみ記載した。その結果、C・Dタイプ的人数がほとんど同数であるにもかかわらずイメージ語の上ではCタイプの方にイメージ語の重複するものが多いことがわかる。しかし、課題に対して抽象化されたイメージが非常に多いということは、後の作業(作舞)に視点が移り、既に舞踊イメージとなっているのではないかと推察され、舞踊記録の一部を検討し参考としたい。

Dタイプの一例としてA631を提示する。(図1参照)

この場合は、最初のイメージ語が“挑戦”であり、挑戦の対象物として扉が象徴化され、これから先の人生への挑戦と重ねあわされている。最後にこじあけて進むとむすばれ、意志決定の表現となっている。この例の場合は、「その扉の前で…」のイメージ課題から“挑戦”とワンステップ飛躍してイメージされ、その後扉つまり彼女自身の人生の扉へと扉に戻されてはいるが、このようにいきなり飛躍したイメージがなされること自体、発達段階に適応しており、既に舞踊への見通しをもって直観的にイメージされているということが伺える。この例のように、今その扉の前に立つ自分自身を想像し、さてそこで何を考え、何をしようとするのか、の自問自答があり扉の向こうに何があるのか、これから出て行く社会ではどんな事が起こるのか、今のままで旅立ってやって

表3 イメージ語の分類 — 2.

(A) 形 態	(B) 機 能	(C) 感情・情緒	(D) 抽 象	(E) 夢・物語
厚く重い扉 会社の扉	開園前の遊園地	好奇心 希望と不安 勇気 後悔 言うべきか言わざるべきか 苛立ち 孤独 希望 心の揺れ動き 不安 気がかり 絶望 ためらい 戸惑い 怒り 悲しみ	歴史の重み 春 人生 未来 未知の世界からの脱皮 女の後姿 異次元の世界 回想 少女時代 神々へ通じる 暗闇 休暇 新たな出発 挑戦 光を求めて 別世界 過去と未来のはざま 道に立ちはたかる巨大な扉 子供の誕生 生命の誕生 自問自答 自分を探す 届かぬ祈り	閉じこめられた人形 広野にたたずむ少女 玩具の心 夢物語

○囲みの長さは、各種類別のイメージ語の占める割合を表わす。但し、同語・同義語は一語のみ記載し、頻度は加算していない。

図1 <ダンス創作メモ>

記載者氏名 R・S	
〈学部〉 保 体 4年 クラス A2	メジャー(4名、氏名を学籍簿等に記す)
〈発表日時〉 昭和59年1月20日 3校時	No.246 R・S
姓 名 群 衆	
学習課題 「その扉の前で」 ○表現の題材及び伝え方のポイント(話し合いの内容等) 「挑 戦」 自分の探している扉が見つからず苦悩するが、ただ一つ自分の扉を見つけ、全身の力をこめてこじあけ進む ○動きのねらい・特徴(form・リズム・空間・力性等について) 多方向に向かって扉を探し求める→多方向 1つの扉をいろいろな角度からさぐる→高・低をつける リズム→不規則でアクセントをつける 空間→低い空間、ジャンプで高い空間を使う 中間部分をより上げる 力性→強	
〈内容点または自問できる工夫点〉	〈担当教員の評語〉

いけるのか、という“不安”“戸まどい”“ためらい”“苛立”となり、“勇氣”を出して、“希望”をもって、また単純に“好奇心”として、もう駄目と“絶望”果ては“悲しみ”“怒り”などの感情・情緒としてイメージされているであろうことが、彼女らのおかれた状況を考えると十分推察できる。これは、イメージ課題「その扉の前で…」のその扉のもつ現時性が強く作用し、自分のこととしての密着性をもつことから即、感情・情緒を喚起したものと言えよう。他のDタイプでは、課題が漠然とした扉として捉えられ“回想”現在と過去の区切りとして、また“春”季節の仕切、“異時元の世界”空間の仕切、“神へ通じる”“暗闇”など曖昧な区切、仕切としてイメージされている。Cタイプの即応性の強いイメージ語が感情・情緒に傾斜したのに比べて、刺激からイメージまでに平静な間を感じさせ、その間のもつ余裕が抽象操作へとつながったものと思われる。Eタイプでは、いきなり“夢物語”“閉じこめられた人形”“広野にたたずむ少女”などの偶意性を帯びたイメージ語がでているが、前述したように、舞踊イメージが先取され、物語構成へ直結したものと考えられる。つまり作舞の前提が強く意識され、刺激（この場合はイメージ課題）→イメージ語→舞踊イメージ（中核）と移行するところを、刺激→舞踊イメージと、イメージ語が操作過程で凝縮され飛躍したものと考えることができる。その例として165 K.Iについて作舞過程の記録（掲載略）をみると、イメージ課題提示直後に“歴史の重み”とイメージ語が出され、舞踊イメージへの操作段階では、「重いこの扉には幾重の歴史がつみ重ねられ、無言の内に私を押しつぶそうとする」と記録されており、微妙なイメージ操作で凝縮されている。また別に1618 Y.Oにおいては、“女の後姿”をイメージ語としており、「堅く閉ざされた扉の前で嘆く女の後姿」を舞踊イメージとして捉えている。これは明らかにその扉に被験者自身の感情・情緒としての密着性はなく、客観的視点から直接作舞が志向されているものと考えられる。このように、作舞経験が増すにつれ、イメージ語が舞踊イメージと直結した形で捉えられている事例もみられるが詳細についての検討は今後の課題とする。

イメージ課題→イメージ語→舞踊イメージ、の流れがストレートに移行していった被験者と、ときに舞踊イメージの予想が先取りされた形でイメージ語の中に凝縮されたりするパターンを見出すことができた。この観点からA～Eタイプを通してみると、イメージ課題からのイメージ喚起にはイメージ課題が自分自身と密着して捉えられたパターンと客観的な想像の世界へイメージしたパターンが見られ、それぞれ特徴づけられているものと考えられる。

2 諸検査との照合

向性検査及び思考力検査とイメージ語の分類によるA～Eタイプの間に関連があるかどうかを探るため集計一覧表を作成した。その結果が表4である。次にA～Eタイプ毎にそれぞれの検査評定を集計し平均を出したのが表5で、各タイプの評定段階への分散を図2～6に示した。被験者60名の各検査段階評定についてタイプ間の検定を行ったが、有意差はみられなかった。（※Bタイプは頻度が1のため、以後検討から削除）しかし、各検査項目の全体平均と各タイプの平均を比べると、一般的内・外向性において、Eタイプ5.0が明確に“やや外向性”に該当し、Dタイプは全体平均より上まわってはいいるが“やや外向性”に近い“両向性”と見做すことができる。次に劣等感・優越感においては、全て“両向性”であるが、Dタイプが全体平均と同数で“やや劣等感”に近い“両向性”といえる。感情安定性・感情変易性では、A・D・

表4 イメージ語のタイプと
検査項目評定一覧表

Type, No. & Name	向性検査の 抜粋項目			思考力検査 の抜粋項目	
	一般	劣等	感情	認知	解決
N = 60					
A					
39 Y・T	5	5	5	2	3
40 J・T	3	4	4	2	2
B					
12 M・U	6	4	4	3	2
C					
1 E・A	5	4	6	3	4
2 K・A	4	3	4	3	2
3 T・A	6	3	6	3	2
4 N・I	6	5	4	1	3
8 S・I	3	2	3	1	1
11 S・I	2	4	4	4	3
13 K・V	5	6	4	3	1
14 A・E	5	4	5	4	1
16 Y・O	6	5	5	3	3
17 K・O	2	3	2	3	3
23 K・U	3	3	5	3	2
24 M・K	4	5	2	2	3
25 N・K	6	6	4	3	2
27 M・K	5	6	4	4	2
28 M・K	5	4	4	2	2
35 T・T	6	5	6	3	2
37 M・T	3	2	5	2	3
38 T・T	3	6	2	3	3
42 T・N	6	5	4	2	4
43 S・N	6	4	6	3	2
44 Y・N	7	5	4	3	3
45 M・H	2	3	3	3	2
49 Y・H	6	5	6	3	1
50 N・S	5	4	5	2	3
54 J・M	7	5	4	2	2
56 E・Y	4	4	4	4	1
59 K・Y	6	4	5	2	1
D					
5 K・I	5	4	5	3	3
6 N・I	4	2	4	2	2
7 S・I	6	3	6	4	2
9 S・I	6	5	6	2	2
15 U・O	6	5	4	4	1
18 Y・O	4	3	4	3	2
19 I・K	4	4	5	4	2
20 K・I	5	5	4	4	4
21 H・I	5	5	4	3	4
22 Y・K	5	2	6	1	2
26 K・K	5	5	4	2	2
29 M・S	6	4	5	2	3
30 E・S	4	4	4	2	3
31 R・S	6	4	5	3	1
33 Y・S	5	5	4	2	3
34 M・S	4	4	4	3	2
36 Y・T	3	3	6	2	3
41 Y・N	4	3	5	2	2
46 C・H	6	5	6	3	1
48 Y・N	5	2	5	2	3
51 H・M	3	4	2	2	3
52 A・M	7	5	7	2	3
53 K・M	4	5	2	3	3
55 E・Y	5	5	7	3	3
57 N・M	4	5	4	2	2
60 K・W	5	5	3	5	2
E					
10 K・I	6	4	7	2	3
32 R・S	5	4	4	3	2
47 H・T	5	5	4	2	2
58 Y・Y	5	4	4	2	2
TOTAL	286	245	267	159	138
AVERAGE	4.77	4.08	4.45	2.65	2.30
± SD	1.25	1.04	1.25	0.83	0.81

表5 TYPE 別 プロフィール

	N	一般的内 ・外向性	劣等感・ 優越感	感情安定 性・変易性	認知型	問題解決 能力
A	2	> 4.0	< 4.5	< 4.50	> 2.0	< 2.50
B	1	6.0	4.0	4.0	3.0	2.0
C	27	> 4.56	< 4.26	> 4.30	< 2.70	> 2.26
D	26	< 4.85	= 4.08	< 4.65	< 2.69	< 2.42
E	4	< 5.0	< 4.2	< 4.75	> 2.25	> 2.25

※ <> = は全体平均との比較を示す

Eタイプが平均より上で“やや変易性”に近く、Cタイプは“両向性”で中庸である。思考力の認知型では、A・Eタイプが“やや直観型”でC・Dタイプは“混合型”に近い“やや直観型”であった。また、問題解決能力においては、A・Dタイプが平均を上まわり“普通”に近い“やや弱い”でCとEタイプは“やや弱い”であった。このように全体平均とイメージタイプの間には明確な差は認め難いものの劣等感・優越感と感情安定性・変易性及び認知型において、タイプ間の傾向に差がみられた。

次に各タイプに内在するものを検討する。Aタイプ（形態）のイメージは、扉そのものの形や材質感・会社の扉という具体的なものが対象となっている。この被験者は特に思考力の認知の仕方が“直観型”に近い“やや直観型”であることは、検査結果の解釈によれば³⁾“すぐに反応するややあわて者”となり、概して直観的イメージで捉えている、その捉え方と類似していることが伺える。Cタイプ（感情・情緒）のイメージは殆んどが、課題から直接自分がその場に直面しているような捉え方から感情・情緒が喚起されているものが多く、向性面は全て“両向性”・認知の仕方も“やや直観型”とはいえ“混合型”に近いバランスがとれたタイプでありながら、問題解決能力が“やや弱い”の判定もあり、情緒へ流れる傾向の包含も見受けられる。Dタイプ（抽象）のイメージは、課題を客観視し飛躍させたイメージのものが多く、内包するものは、劣等感・優越感においてやや劣等感に近い両向性を示してはいるが、何事も慎重で引き込み思案の傾向をもちながら“やや感情変易性”の因子である機敏⁴⁾で話好き、怒りっぽいなどの傾向ももち合わせやや複雑な内面性を覗かせている。このような内面をもつものに抽象イメージをもつものが多いと断定は出来ないが、傾向の一端を表わしているものと思われる。Eタイプ（夢・物語）のイメージは、課題から直接ドラマの世界へ飛び込み、舞踊イメー

図2 認知型

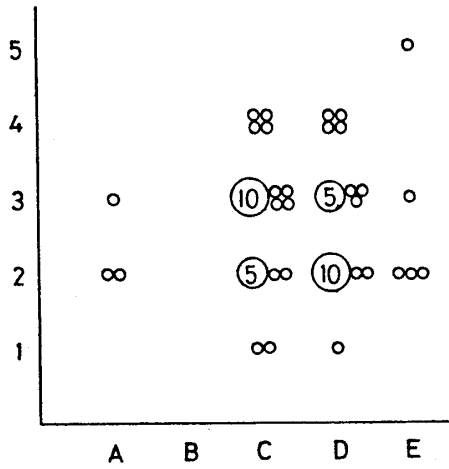


図5 一般的外・内向

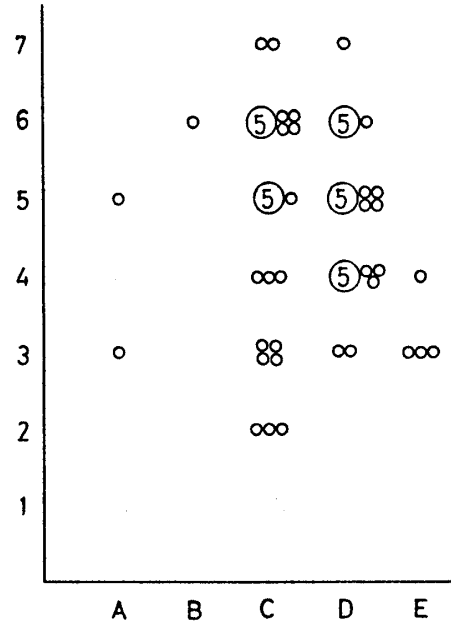


図3 問題解決

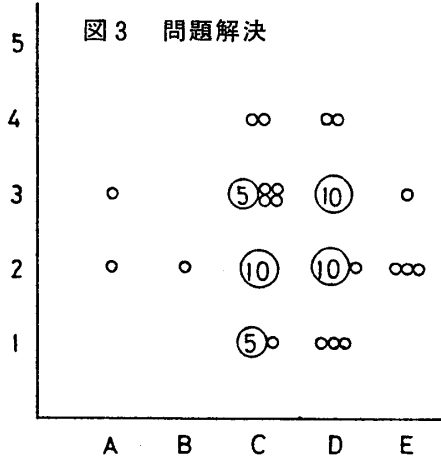


図6 感情安定性・変易性

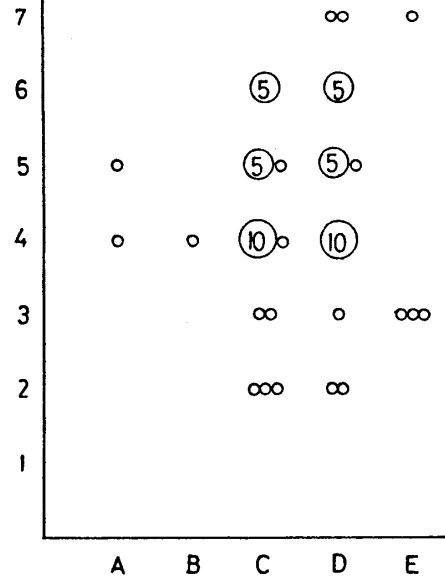
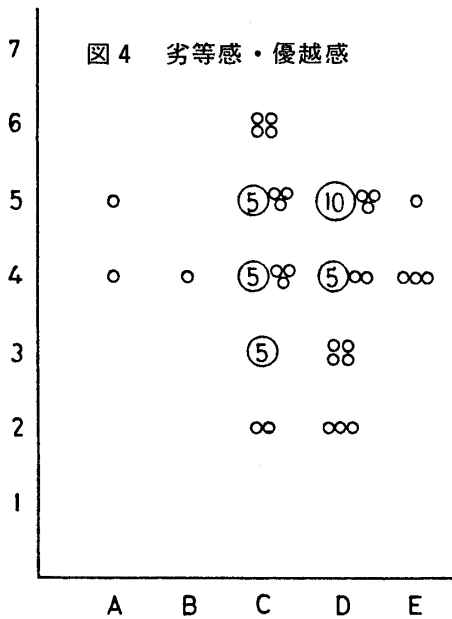


図4 劣等感・優越感



ジの段階が先取りされ、偶意性の強いものが多い。向性面ではDタイプと近似しているものの、認知の仕方が“やや直観型”で問題解決能力がやや弱い。つまり、おざっぱに捉えて直行する傾向がみられ⁵⁾ “自分のことを考えている内に希望や空想がおきくふくらんでいくこと”がよくあるようで、偶意性の強さもその傾向の一端ともいえよう。

IV. ま と め

作舞の前段階でのイメージ発想とパーソナリティの関係について、前回の検査結果の一部をもとに検証した。得られた結果は次の通りである。

①イメージ課題に対して得られたイメージ語は、その大半を“感情・情緒”及び“抽象”のグループで占められており、これは、発達段階に応じた結果であろうと思われた。

②個人が内包するパーソナリティの一部とイメージ語との関連性について、数値の上では有意な差をみることができなかった。

③個人のプロフィールをタイプ別に照合した結果では、直観・直情的タイプは具象的、問題解決能力が弱いタイプは情緒的、冷静・沈着なタイプは抽象的な発現にそれぞれ流れているのではないかということが外観できた。

尚、本研究の中で、イメージ語が舞踊イメージと直結した形で捉えられている事例もみられたが、詳細についての検討は今後の課題とする。

注

- 1) 田川典子、イメージ発想に関する研究(2) 東京女子体育大学紀要第20号
- 2) 松本千代栄他、日本女子体育連盟紀要'82-1, p.16 財団法人日本女子体育連盟
- 3) 津留宏他、思考力診断検査手引 p.17 田研出版 1976
- 4) 田中教育研究所編、TK式向性検査第Ⅱ形式 p.17, p.18 田研出版 1966

参 考 文 献

- 1) 岩下豊彦 SD法によるイメージの測定 1985 川島書店
- 2) 伊藤隆二他 知能と創造性 講座現代の心理学 1981 小学館
- 3) 河合隼雄他 性格の科学 講座現代の心理学 1981 小学館
- 4) 松井三雄他 体育測定法 1986 杏林書院
- 5) 中村 明 感情表現辞典 1980 六興出版
- 6) 大野 晋他 類語国語辞典 1985 角川書店
- 7) 林真幾子 動き(舞踊運動)の探究 東京女子体育大学紀要第20号 1985
- 8) 依田 新監修 新教育心理学事典 1983 金子書房
- 9) 加藤秀俊他 個人・集団社会 講座現代の心理学 1982 小学館